
終わらない夏をさがそう

裕久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない夏をさがそう

【Nコード】

N2071C

【作者名】

裕久

【あらすじ】

彼の中学校の卒業と同時に付き合い始めた二人。彼は甲子園という夢を追いかけて、彼女はそれを見守ってきた。今、彼の立つ甲子園に彼女の姿はない。幼くてへたくそな恋だったね。

前編

さっきから降り出した雨は一向にやむ気配を見せない。でも、誰もそんなこと気にしてなかった。

バックネット裏の屋根の下。

さっきまで自分の応援しているチームに野次を飛ばしていた父兄たちも今はひっそりと息をひそめてる。

九回の裏、すでに2アウト。

スコアは1－0のまま動いていない。

あと一人。

あと一人アウトにすれば勝負は決まる。

マウンドに立っているのはエースナンバーの萩原くんではなく、背番号11の見知らぬ人だ。

そして、静寂は破られた。

その見知らぬ11番がラストバッターを打ち取り、結局四回に一点を取った海南商業がその一点を守り抜いて優勝を決めた。

これで海南商業は昨年と続けて甲子園出場を果たしたことになる。マウンドでは、ベンチから飛び出してきた選手たちが11番を囲んでおおはしゃぎしている。もちろんその中に萩原くんもいた。

さっきまで沈黙を守っていた海南の応援団もみんな総立ちになっている。

「帰ろっか」

海南の制服を着ていない私たちは、さすがに応援団に交じるのは気が引けて、少し離れたところに座っていた。

「いいの？ 閉会式、見なくていいの」

無理やりひっぱってきた薫が私を見てそう言う。

「いいの。雨もやみそうにないし。帰れなくなったら困るから」

「萩原くんに会わなくてもいいの」

「いいの。もう、いいの」

雨足はだんだん激しくなってきた。今朝は晴れていたのに傘なんて持ってきてない。

球場ではエールの交換が行われているのかとても賑やかだ。

私は立ち止まり、球場を振り返った。

優勝おめでとう。

私から離れてく一步を、踏み出してしまったね。

萩原くんは同じ中学の二つ上の先輩だった人だ。

中学一年生にとって三年生なんていうのは果てしなく大人に見えた。訳もなく背伸びしたがるお年頃であった私たちはみんながみんな、競うようにして自分の好きなのは三年生のくく、と言い合った。

中学生になりたての私は、野球なんてまるで興味がなかった。

ただ小学校が一緒に同じクラスになった涼子ちゃんに誘われて入ったテニス部のコートのすぐ横で野球部が練習していたので、何気なく眺めることは多分にあった。

一年生で、そのうえ初心者で下手だった私たちは当然コートになんて入れてもらえなくて、筋トレと称してはグラウンドを走らされてばかりだった。

なので野球部の練習は嫌でも目に入ってきた。

先輩のホームランしたボールをもらいに走らされるのも一年生。

テニス部には美人で有名な路子先輩がいて、野球部の中にも先輩のファンが大勢いた。

おかげで野球部の人はテニス部の女子にはやたらと優しくかった。

萩原くんは、野球部だった。

一人で黙々とピッチャーのメニューをこなしている人だった。

ほかの人たちみたいに私たちをむやみにちやほやしてはくれなかつ

た。

子どもで、精一杯大人ぶりたい私にとって萩原くんは「恋愛」の対象として申し分なかった。

こんなもの。

恋をするって、こんなもの。

萩原瑛大、海南商業高校三年生。

私より、二つとしうえ。

教室はまるでサウナのようだった。

クーラーはもちろん扇風機ですらなくて、クラスで作ったおそろいのオレンジのうちわを時折ぱたぱたさえているだけの、からだにまとわりつくような空気の中でみんなは虚ろな目をしていた。

妖しげなその景色になじめそうになくて、教室の外で薫と二人突っ立っていた。

すると白い布に針を刺していた由夏子が私たちに気づいてたちあがり、周りの空気をもったりと揺らした。

「昨日、さぼったな」

由夏子の三白眼は鋭く光り冷気が漂う。

各々の作業をしていたクラスメートが私たちのほうを振り返る。

「昨日、決勝戦だったんだ」

すると由夏子は大仰に溜息をついて見せた。

「昨日が県大会の決勝戦だったってことは私もよく知ってる。でもね。私たちは昨日も大忙しだったのよっ」

由夏子のもっていた針がキラリと光ったのにびびる。

「今日からもう八月なのよ。学祭まであとたったの一か月！わかつ

てんの！真夏！！！！」

「だから、ほら、それは、ごめんなさいって。ば。でも、薫も一緒だったんだからね」

隣の薫を差し出すと、由夏子はふんと鼻で笑った。

「薫は小道具係でしょ。あんたは衣装。衣装なんてまだ全然だっていうのにそんなにほいほい遊んでいい場合じゃないの！」

遊んでたわけじゃないやい。

昨日は海南が、萩原くんが甲子園に行けるかどうかの大切な試合の日だったんだからね。

ってもちろん言えないけど。

そもそも由夏子は萩原くんのことなんて知らないはず。

「まあまあ、そんなに怒んなくて。大丈夫、ちゃんと間に合うよ」

「倉吉くんてば、また真夏を甘やかす。この子すぐさぼるんだもん。びしっと言っとかなきゃ」

「ちゃんとやってんだろ、篠原」

「うんうん、やってるやってる、ちゃんとやってる」

倉吉くん、多謝。

薫の彼氏でもある倉吉くんは、薫を通して萩原くんのことも知ってるんだろう。

たぶん。

それゆえのフォローなんだろうな。

うちのクラスの大黒柱は、本当に頼れる人だ。

だいたいうちの学祭が九月に入ってすぐにあるもんだから、七月の終り頃から夏休み返上してどのクラスも準備に追われることになる。夏休みは学祭一色。

部活やってたりするともう一日学校にいることになるし、夏休みなのに毎日制服着ちゃってるよ。

うちのクラスは一年生らしくステージ発表ということで劇をやることになってる。タイトルもずばり「白雪姫」ときたもんだ。

おとついまでは布の買い出しもまだ、という状況だった。

でも本番は九月なんだしのんびりやればいいじゃない、と考えてるのは私だけのようでスタッフの集まりを一日でもさぼってしまうとこんな風に叱られてしまう。

その罰として私は校門から徒歩二分のところにあるコンビニに使いっぱしりを命じられてしまった。

「明日は十時から。今日ノルマ果たせなかった人は絶対うちでやってくるよ」

衣装の責任者である由夏子さんの有無を言わさぬ声。

私の担当は七人の小人のうちの三人分で、赤と黄色と緑の衣装だ。ヒロインである白雪姫の衣装は三人がかりで取り組んでてなかなか凄いらしい。まだ裁断しただけ、って言ってたけど。

八月も、もう一週間を過ぎた。

学祭まで一か月を切った。

窓から見える中庭では三年生のどこかのクラスがステージを作るために机を並べている。

ほかのクラスの進み具合の情報もばんばん入ってきてどんどん切羽詰った雰囲気になっている。

明日も明後日も、毎日毎日頑張って、完成させなくちゃならないのだ。

でも、明日は。

「真夏、明日」

「十時からでしょ。わかってるって」

「来れるの」

「え」

「明日っからじゃないの」

「なにが」

「何がって」

由夏子は少し苛立ったように眉を寄せた。

「甲子園の開会式、明日じゃないの」

びっくりした。

由夏子の口から甲子園の話が出るなんて思いもしなかった。

「行かないの」

「明日は小人のズボンを仕上げなくちゃいけないんだ。だから、がんばる」

訝しげに私を見る由夏子にガッツポーズをしてみせた。

そう、と由夏子は少しやさしい目で私を見た。

なんだ。

知ってるんだ。

由夏子の優しさが、目にしみた。

「帰ろう、薫」

「アイス食べよう。薫さんがおごってあげるよん」

ここにも優しい人が、ひとり。

キオスクで苺のアイスを買ってもらってホームの陰に隠れた。

「明日っからだね」

「由夏子とおんなじこと言ってる」

「行かないの」

「どうせ開会式だもん、行ったってつままないよ、きっと」

私はこっそり定期入れをポケットから取り出して中の写真を眺めた。隣の薫は知らんふりをしてくれる。

二年前の3月15日。

卒業式の日には萩原くんの隣で嬉しそうに笑ってる私がいる。

恋人同士じゃなかった。

好きです、も言えなくて隣に並んで写真を撮っただけの女の子。それが私だ。

萩原くんは中学時代から野球の才能を認められていたらしく、数多の高校から勧誘があったらしい。

萩原くんがその中から選んだ海南商業は過去に何度も甲子園に出場

を果たしているいわゆる地方での強豪校ってやつだ。

甲子園を目指す萩原くんとしては当然の選択だった。

その春休みに、思いがけず萩原くんから電話があって、そして私たちは始まった。

恋人として、始まった。

とても突然な始まりに私はびっくりして、そしてとっても不思議だった。

どうしてこういうことになったんだろうって。

萩原くんはあまり言葉をくれる人ではなかったなのでそれは今でも謎のままだ。

当時の私はただイエスと頷くことしかできなかったのだから。

そして私は今もおもってる。

どうしてこんなことになったんだろうって。

去年の夏以来萩原くんに会っていない。

高校受験を控えた夏休み、私は甲子園出場をかけた地方大会へと通った。

萩原くんは二年で、エースではなかったけれどマウンドに立っていた。

そして甲子園出場を決めたのはエースではなく二年生の萩原くんだった。

その萩原くんに試合前に頑張ってねを言っただけで、おめでどうの言葉は電話だった。

ひとりで甲子園まで行く元気も情熱もなかった。

それに何より私は受験生だった。

壊れかけのおんぼろ扇風機をそばでぶんぶん唸らせながらテレビを見ていただけだった。

一回戦、名ばかりの三年生エースはついに一回も投げることなく、萩原くんが完投勝利をはたした。

そのあとの二回戦でその夏優勝した学校と対戦して負けてしまったけれど、彼は地元ではヒーローだった。

誰もが来年も、と期待をかけた。

萩原くんは相当のプレッシャーを背負っていたに違いないのに、それを分けてもらえるはずの存在であった私は彼の悩みを聞くこともできなかった。

だから、私は逃げることにしたのだ。

今年、甲子園に行けないのは私のせいじゃないんだ、って。学祭の準備が忙しくて抜けられないから、って。

「海南の試合っていつ」

「12日の火曜日」

「うわあ、その日って初めて劇の通し稽古やる日じゃない」
ほらね。

口実になってしまう。

それを言い訳にしてしまう。

行かないのは私のせいじゃないんだって、そう思いたいんだ。

「いいの、テレビで見るから」

強がりじゃない。

萩原くんのこととは忘れてしまわなければならないかもしれない。

今の状態で、誰が私のことを彼の彼女だって認めてくれるんだろう。甲子園まで行ってしまえば、忘れられなくなる。

忘れなくちゃいけない。

忘れなくちゃ、いけない。

そうでないと一生次の恋にすすめなくなってしまう。

でも、今、心の中は萩原くんでいっぱいだ。

たぶん夏という季節が余計にそう思わせるんだろう。

夏は、萩原くんの季節だから。

忘れなくちゃいけない、ってわかってる。

わかってるんだけど。

この矛盾にとっても苛々する。

そして12日。

十時から海南の試合が予定されていたこの日は、気づくと一日が終わってしまっていた。

翌日の新聞で初戦突破できたことを知った。

だんだん遠くなっていくね。

私の手の届かないくらい遠くなっていくね。

好きにならなきゃよかった。

萩原くんなんて、出会わなければよかった。

「落したよ」

今日は舞台稽古の二日目、私はひとりで衣装一式抱えて体育館へ向かう途中だった。

知らない声に振り返ると、いかにも野球部といった坊主頭の人が人懐っこい笑顔で立っていた。

手には緑の小人のズボン。

「3組、白雪姫なんだって。がんばってな」

笑顔のまんまその人は自分だけ喋っていつてしまった。

誰だあの人。

がんばるものにも、私の担当である小人の衣装はすでに完成してしまっている。

そういえば自分の学校の野球部とか、全然知らないんだっけ。

あれ、今年の夏の成績は??

ははは。

愛校心のかけらもないことがばれてしまう。

「あ」

体育館の片隅で思わず声を出した。

「なに」

由夏子がめんどくさそうに振り返る。

先ほどのあの野球部員（と思われる人）がいたのだ。

大きな体格で、遠目からも頭ひとつ飛び出しているのがわかる。

「あの人、誰」

「え？ ああ。あのでっかいハゲ。5組の橘くんでしょ」

「ふうん」

「なに、あれがどうかしたの」

「ううん、べつに」

似てる。

萩原くんにも、似てる。

顔がっていうんじゃないで、でも似てる。

萩原くんも悠に180cmをこえるくらいに長身の人だ。

体格的には、絶対似てる。

橘くんの5組は誰かの書いたオリジナル劇をやるそうで、彼は野球

部の鬼コーチという役だった。

どうやらスポ根ものらしい。

大きな声を出して怒鳴り散らす姿がほほえましくて、私はひとりでくすくすと笑った。

それ以来、大きな橘くんは何かと目につくようになった。

萩原くんになってたから、私の心に現れた。

それは単なるきっかけ。

橘くんが心に現れたきっかけ。

なんだか言い訳してるみたいだけど、でも言い訳をしなくちゃいけない理由がどこにあるんだろう。

「えーっと、明日は午前中が劇のリハで、午後からはグラウンドで応援の練習やります」

倉吉くんの言葉にブーイングの嵐。

劇の方がなんとかなってきたと思ったら、次は体育祭のメインであ

る応援合戦の練習が始まった。

うちの学祭は文化祭と体育祭が続けてあるのでほんとうに大変。私たち3組はクラスの大黒柱である倉吉くんを団長に据えた。

噂によると、5組の団長は橘くんらしいよ。

「倉吉くん、明後日も練習あるよね」

明日は別に平気だけど、明後日は海南の大切な二回戦の試合があるのだ。

「んー、午前中だけの予定だけど」

「はあー」

ほらね、私って萩原くんの試合を見に行けない運命なんだ。サボるわけには

「薫、明後日あいてる」

「明後日？あいてるわけないでしょ。倉吉にずっとやらせてるんだから。・・・もしかして明後日って17日？あ、ごめん、私、ダメだから」

いかないだろうなあ。

8月17日の海南の二回戦。

対する松島学園は今年で26回目の甲子園出場を誇るチームで、優勝候補の筆頭に挙げられている。

対松島学園が決まったとき、誰もがため息をついて奇跡を願っただろう。

勝てないに決まってるってみんな言うけど、でも私だけは奇跡を信じようと思う。

たかが二回戦。

こんなところで萩原くんの夏を終わらせるわけにはいかないのだ。

後編

太陽がとても高い。

熱い陽射しの照り返すグラウンドでは多くのクラスが応援合戦の練習に励んでいた。

私たちのクラスカラーはオレンジで、女子はみんなオレンジのぽんぽんを手にも、まとめ役になってしまった薫の指示を聞いている。

薫の声はちゃんと耳に届いているのに、頭が理解してくれない。

地面が、こんなにやくのように揺れている。

グレープフルーツゼリーのような空気に押しつぶされるように、だんだんと息苦しくなっていく。

私はゼリーに飲み込まれるように宙を漂った。

誰かの叫ぶ声が遠くで聞こえた。

そして、後に残るものは、闇

「日射病ね。何時から外にいたの。え、11時からずっと？あのね、10時から2時までの間がいちばん日光の強い時間帯なの。何もそれを選んで外に出ることないでしょう。あ、体育祭の練習ね。あなた責任者？外に出るときは十分に気をつけて。水分補給もこまめに。ほかのクラスの子たちにも言っておいてあげてね」

保健の九堂先生の声がする。

それに応えているのは倉吉くん？

薫？

九堂先生の言った日射病なんて言葉は聞いてなんてなかった。

ただ、どうしようという思いが広がっていく。

どうしよう、ものすごい病気だったら。

どうしよう、このまま死んじゃったら。

死んじゃうのなら、その前にもう一回萩原くんに会っておきたい。
声が聞きたい。

ちゃんと話がしたい。

このまま私が消えてしまうなんて、そんなのは絶対に嫌だ。

「あ、気がついた。真夏」

目に飛び込んできたのは薫の心配顔。

「日射病だって。倉吉が青くなってた。俺のせいで篠原が倒れたー、
って。真夏、大丈夫なの」

「うん、だいじょうぶ。倉吉くんのせいじゃないって、言っ
てね」

「わかった。でも真夏。ほんとに甲子園行きたかったんじゃないの」
「そんなことないよ」

自分でもしらじらしいことを言ってるのがわかる。

強気の嘘が心に痛い。

「どうしてそんなこと聞くの」

「真夏のは日射病なんかじゃなくて、萩原くんに会いたい病なんじ
ゃないかなって、そう思っただけ」

それだけ言くと薫は立ち上がる。

「九堂先生、用事があるって出て行ったけど、真夏はまだ寝てなよ。
後で迎えにくるから」

じゃあ、とドアを閉めて出て行った。

無人の保健室は妙にしんとしていて淋しさが募る。

遠くグラウンドのざわめきが心地いい。

「失礼しまーす」

突然のんびりした、知っている声がドアをあけた。

「あれ、九堂先生いねえのかよ。ちえ。・・・お、こないだの3組
の小人のズボンの」

声の主は橘くんだった。

「どうした」

「ちよっと日射病で。橘くんは」

「俺は足挫いた。湿布でも張ってもらおうって思ってきたのに先生いねえし」

「湿布くらいなら私がしたげるよ」

よっころしよとベッドから降りるときに少しめまいがしたが根性で持ち直した。

葉棚の引き出しを探っていると後ろでかきーんというバットの音と歓声が聞こえた。

驚いて振り返ると、切ないほどの夏の風景がテレビに映っていた。

「お、東、勝ってんじゃん」

「うわあ、保健室にテレビがあるなんて知らなかった。これ、どこ
の試合」

「東日本短大付属と北川。実はこれ目当てでここ来たんだよね」

にーっと笑う橘くんにどきどきする。

「お、わりいな」

どきどきのまま、橘くんの左足首の赤く腫れたところに湿布を貼る。

「高校野球、見るの」

「え、あ、うん」

自分の学校の応援に一度も行ったことがないので、なんだか気まずい。

「甲子園まで行ったりとかすんの」

「行かない」

妙にきっぱりと言い切ってしまった私を見て、橘くんはくすくす笑う。

そして意味ありげに私を見て、ふうん、と言った。

太陽が、また高くなっていく。

今日も絶好の試合日和だ。

「真夏、今日海南の試合なんでしょ。何時から」

「10時」

「そっか。勝てるといいね」

由夏子の言葉にただ笑って頷いた。

私は今山ほどの後悔に埋もれている。

どうして今私はこんなところにいるんだろう。

萩原くんはこの街にはいないのに。

萩原くんを取り巻く人たちは、みんな彼のもとにいるというのに。

どうして彼のそばで彼を見ていないんだろう。

もしかしたら今日でおしまいかもしれないというこの時に。

どうして私は彼から逃げてしまったのだろう。

今でもまだ、こんなに彼のことを思っただけで切なくなるというのに。

「真夏、平気？ 顔色わるいよ」

日向に出ると、足もとが揺れた。

「ちょっと、大丈夫。保健室、行っといでよ。テレビ、あるんでしょ」

由夏子の心がうれしい。

「ありがとう」

のろのろと足を踏み出す。

「お、やっぱり来た来た」

予想していた通り、保健室のテレビの前には先客がいた。

「なんたって海南の試合だもんね」

にーっと笑いながら橘くんは私のために椅子を用意してくれた。

「九堂先生は」

「ああなんかさっき陸上部のやつが倒れたってんで飛び出して行った」

「橘くんは。野球部、練習あるんじゃないの」

「俺？ 俺もね、日射病」

とんでもない野球部員だ。

そこでウィーーーーーンという聞きなれたサイレンの音が響いて、テレビの中の審判の右手が挙がった。

プレイボールだ。

海南は後攻で、まずマウンドに上がったのはエースの萩原くんだった。

た。

彼を見ると切なくて、目が熱くなった。

「俺、あんたのこと知ってるんだ。篠原真夏さん」

「え」

突然フルネームで呼ばれて思わず橘くんの顔をまじまじと見てしまった。

「こいつの彼女だろ」

そう言って画面の萩原くんを指差す。

「え」

「俺の兄貴がさ、海南の野球部だったんだ。ま、こいつと違って三年になってもベンチ入りできなかったんだけど。あんた前はよく海南まで行ってたんだって？有名だって兄貴が言ってた」

そういえば、と頬がゆるむ。

何年か前には差し入れをもって練習を見に行ったこともあった。

まだ中学生だった私が高校生の中に入っていくのはすごく勇気がいったけど、みんな私を歓迎してくれたし、なにより萩原くんがとても喜んでくれた。

言葉の少なかった彼の喜ぶ顔が見たくて、試合のたびに山ほどの差し入れを抱えて行ったっけ。

「この頃は顔見せないって言ってた」

橘くんが私の顔を覗き込む。

「もうずい分前から、会ってない」

そう言うのが精いっぱい。

ふうん、と橘くんは興味のなさそうな顔をしてテレビに向きなおる。四人目のバッターをレフトフライに仕留めて一回の表は終了した。

「自然消滅ってこういうのなんだろうね」

ブラウン管の向こうの萩原くんは緊張した面持ちで監督の言葉を聞いている。

滴る汗を、無造作に拭う彼がまぶしくて目をつぶった。

今、彼はこの瞬間を大切に生きている。

萩原くんの夏は今年が最後。

今年で最後。

遅かれ早かれ夏は終わってしまうけれど。

そして、二度とやって来ない。

甲子園にいる彼にとつての夏はそういう季節なのだ。

「夏が終わってしまうのが怖いのに」

海南の攻撃は三者凡退に終わり、二回の表へ。

萩原くんの立ち上がりはいつもそんなに好調ではない。

1アウトを取った後のバッターにフォアボールを与えてしまう。

「夏が終わってしまったあとの萩原くんを見るのが怖いのに」

夢は叶わないより叶ったほうがいいに決まっている。

でも、そのあとは？

幸せのままに生きていけるのだろうか。

燃え尽きてしまったあと、それからを生きる目印に迷ったりはしないのだろうか。

今まで夢に向けてきた努力や情熱の行き場に困らないだろうか。

昔を振りかえるだけの人生になりはしないだろうか。

彼はどうするのだろうか。

夢を叶えてしまって、どうやってそれから生きていくのだろうか。

目印を見つけれずに戸惑う萩原くんを、私は想い続けられるのだろうか。

「変わんねえよ、あの人。野球をやめちまうわけじゃないし」

橘くんの声に重なってバットの快音が響く。

あわててテレビに目を向けると、一塁にいたランナーが悠々とホームに帰っていた。

ライトへのスリーベースヒットだった。

「やっぱり松島学園はつえーよ」

そして、ピッチャーの交代が告げられた。

見知らぬ11番が現れ、萩原くんは彼にボールを手渡した。

萩原くんの夏が、たったいま、終わってしまった。

テレビに映し出される萩原くんの後ろ姿が悲しくて、私は涙を抑えられなかった。

私は、彼の夢と一緒に彼を好きになった。

夢を持っていない彼だったら、きっとこんなに好きにはならなかった。

輝いてる彼だったから、だから、私は彼を見つめ続けたのだ。

ピッチャーが代わっても海南の劣勢は変わらなかった。

辛うじて5回に一点を入れただけで、あとは松島学園の独壇場だった。

結果は8－1。

海南の大敗だった。

それでも私は最後まで目をそらすことなく海南のナインを見てた。

キャッチの田中くん。ファーストの木村くん。セカンドの堀田くん。

サード青谷くん。ショート酒井くん。レフト松本くん。センター辻

田くん。ライト村上くん。

そして時折映るベンチの中の萩原くん。

ラストバッターは酒井くんだった。

松島学園の校旗掲揚、校歌斉唱。

みんなが泣いている中、萩原くんはひとりじつと空を見上げていた。しっかりと顔をあげて立っていた。

ああ、そうだね。

まだ終わってないんだね。

確かに甲子園の夢は終わってしまったけれど、でも次の夢は今、輝き始めたんだね。

見守っているよ。
萩原くんと、その夢を。

太陽の高度はピークに達していた。

でも陰に入ると風に涼しさが感じられるようになった。

夏は、終わってしまったのだ。

グラウンドの見える渡り廊下で、橘くんと並んでグラウンドを見ていた。

「橘くんも、やっぱり甲子園を夢みてるの」

「んー、そうだなあ」

「行けそうなの」

「ま、無理でしょ。うちの学校じゃ県大会のベスト8がせいぜいだしな」

そうだったのか。

「でも俺、別にそれでもいいと思ってる」

橘くんの目は遠くを見てる。

そして私は橘くんの目を見てる。

「夢は追いかけてくもんだからさ。叶ったあとのことなんか考えない」

ちらりと私を見て、にーっと笑う。

「そういうもんだろ」

橘くんにつられて、私も笑った。

夏は必ずやってくる。

来年も、再来年も、その次の年も。
毎年毎年、迷うことなく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2071c/>

終わらない夏をさがそう

2010年12月13日19時50分発行